

ナイルとファラオの夢の跡を追う

感動のエジプト紀行8日間

1月22日午前8.00"、名古屋駅からバスで関西国際空港まで移動してエジプトへ旅立った。今回は現職時代にお世話になった神谷さん夫妻と一緒に、何十年ぶりに夫婦で一緒する。阪急交通社のツアーに参加して、歴代ファラオの夢の跡に対面する。

1 利用されない関空と がら空きのエジプト航空

名古屋から15名、福岡からの4名が加わり19名の参加者は、6組の夫婦と一人参加者が7名(男4名、女3名)という構成。添乗員は女性の佐溝友美さんと珍しい名前、聞けば岐阜県の出身という。

関西国際空港はこれまで利用したことはなく初めてである、2本目の滑走路も完成し国内では羽田に次ぐ規模と能力を備えながら、伊丹空港との競争で利用者数はのびず大阪府知事橋下さんの「伊丹空港廃止論」が話題になっている。まったくで、国の航空行政はなっとらん、セントレアもそうだったが、関空を造るときには、伊丹空港は廃止するはずだったのにそればかりか、神戸空港まで造っている。

当然のように税金が投入されている、この無神経さ、バカさかげんにはあいた口がふさがらない。伊丹空港が近くて使いやすいから客が多い、では何故関空を造ろうとしたのか!! 他にも空港建設では話題に事欠かない、開港したばかりの茨城空港では定期便は韓国のアシアナ航空の一便だけ。こんなところに何故大金を使うのか、もちろん茨城県民の税金だけで造るといふならまだまだが.....。

関空に11.00"到着、新しいだけになかなか立派なものだ、でもセキュリティを出た所などは少し狭いと感じた。関西のハブ空港として機能させるのに、ちょっとばかし不安を感じさせる。搭乗ゲートへは距離があるので無人のウイングシャトルで移動する、搭乗ゲートにより中間駅と終点駅で乗り場が分けられている。ターミナルは立派だが人が少ない、周りの搭乗ゲートを見ても人は少なくちょっと寂しい、これでは年々赤字額が増すのみだろう。早く関空に一本化するための手を打つべきだ。

そして、14.10"のエジプト航空MS-0963便は定刻に飛び立った。飛行機はエアバスA340-200で私たちの席は30Hと30Kで、2.4.2席の配置の窓際席と通路際席。この飛行機の席はAB DEFG HKの呼び方になっている、今回も添乗員に聞いてみたがCとIが抜けている理由は分からなかった。それよりも、席はがら空きでこんな具合ではエジプト航空も近いうちに撤退して、成田一本にするのではないか。でもそのおかげで4席を独り占めして横になって行くことができ、14時間の飛行の苦痛を和らげてくれたことは間違いない。ラッキー!!。



出発前のMS - 9 6 3 便



エジプトへの飛行経路

2 エジプトは遠いがノンストップで

飛行機は離陸すると瀬戸内海上空で大きく右へ旋回して、朝鮮半島を横切り天津、

北京、ゴビ砂漠からウルムチ、タシケントへ、そしてイラクを避けてカスピ海沿いからダマスカス、アンマン付近からシナイ半島の先端をかすめてナイル川沿いの街ルクソールへ9500KMを14時間をかけて一ツ飛びする。

22.05"到着、意外と多くの灯りが見えたという印象、タラップを降りてバスでターミナルまで移動するが、数機の小型機が広い場所に駐機しているだけの田舎の空港だ。ターミナルでは男性職員のみで女性の姿はなく色気がない、荷物を受け取りバスでホテルへ向かう。暗くなった街中で数人の男性を見かけたが、まるで日本の真冬に着るようなジャンパー姿なのに驚いた。朝夕は冷えると聞いてきたが、こんな光景を見るとは思わなかったのだ。

ここで現地ガイドの「ムスタファー」さんと初顔合わせ、今回は彼がスルーで案内してくれるという。とても流暢な日本語で安心した、そして、彼の初仕事は早速必要になるエジプトポンドへの両替。何しろトイレでは1ポンド必要なので必ず小銭が必要になるのだ。私も1,000円を50ポンドに両替してもらう、いただいた1ポンド紙幣はよれよれの、これがお金かと思うような代物だった。この両替はガイドのムスタファーがやるのではなく、それだけのために助手がいた。

そしてソフィテルカルナックホテルへ到着、暗くなっていて周りの様子はよく分からない、2階建ての建物で私たちは1階の1319号室に落ち着いた。

3 エジプトはどんな国か

エジプトについてはピラミット、スフィンクス、大神殿にナイル川、スエズ運河といったことと、ナセル、サダト、ムバラク大統領の名前を知っているくらい。すばらしい歴史を持つ国だがどんな国なんだろう……………。

今のエジプト

国名	エジプト・アラブ共和国
人口	8,300万人
大統領	ホスニー・ムバラク
議会	一院制 任期は5年
公用語	アラビア語
宗教	イスラム教85% キリシト教他15%
首都	カイロ
通貨	エジプトポンド(約20円)
平均所得	約55万円/一人当たり
独立	イギリスから1922年2月28日

歴史

「エジプトはナイルの賜物」という古代ギリシアの歴史家ヘロドトスの言葉で有名なように、エジプトは豊かなナイル川のデルタに支えられて世界四大文明の一つである古代エジプト文明を発展させてきた。

紀元前3000年頃	ナルメル王がエジプト統一、暦ができてヒエログリフが確立する、首都はメンフィス
紀元前2600年～2500年頃	サッカラのピラミッド、ギザのピラミッド建設
紀元前1500年頃	王家の谷に墓を造営、首都はテーベ(ルクソール) アジア、ヌビアに軍事遠征領土が最大に
紀元前700年頃	ヌビア人ピアンキ王位に
紀元前525年	ペルシアに征服されてペルシア帝国
紀元前400年頃	ヘロドトスが「歴史」を著す、紅海とナイルを結ぶ運河完成
紀元前30年	ローマ帝国の属州となる、首都はアレキサンドリア
639年	イスラム帝国によって制服される
969年	チュニジアのファーティマ朝に制服される。その後イスラム王朝が500年以上続く。
1789年	ナポレオンのエジプト遠征後近代国家形成の時代を迎える
1869年	スエズ運河を開通させるが、財政負担は経済自立に決定的な打撃を与え、イギリスの進出を招いた。

1882年	イギリスの保護国となる
1922年	エジプト王国が成立
1923年	独立
1953年	エジプト共和国
1958年	アラブ連合共和国(シリアと連合)
1971年	エジプト・アラブ共和国

文化

世界遺産としてピラミッド地帯、古代都市テーベ、アブシンベル近辺のヌビア遺跡、カイロ歴史地区、アブ・メナー、聖カトリーナ修道院地域、ワディ・アル・ヒタンがある。神殿には紀元前3000年頃に誕生したといわれる絵文字「ヒエログリフ」が刻まれている。よく知られているのが、ヒエログリフで書かれたファラオの名前を強調するために、ロープで作られた楕円形の枠が「カルトゥーシュ」である。このカルトゥーシュにヒエログラフで自分の名前を、Tシャツなどに刺繍したお土産は人気がある。

地理と気候

アフリカ北東隅に位置し、国土の90%は砂漠で、西にはサハラ砂漠の一部であるリビア砂漠、東方には紅海とスエズ湾に接するアラビア砂漠がある。リビア砂漠には海拔0m以下という地域が多く、カッターラ低地は海面より133mも低く、アフリカ大陸で最も低い地点とされている。シナイ半島の北部は砂漠、南部は山地になっており、エジプト最高峰のカテリーナ山(2637m)や、旧約聖書でモーゼが十戒をさずかったといわれるシナイ山がある。

ナイル川はエジプト国内を1545kmにもわたって北上し、河口で広大なデルタを形成して地中海にそそぐ。デルタ地域は国内で最も肥沃な土地だったが、アスワン・ハイダムによってナイル川の水量が減り、地中海から逆に塩水が入り込むようになった。砂漠気候で住民はナイル川沿い及びデルタ地帯、スエズ運河付近に集中し、国土の大半はサハラ砂漠。

経済

スエズ運河収入と観光収入に依存するところが大きい。代表的な農業製品は綿製品だが、価格競争において後塵を拝している。他にはサトウキビの生産が多い。

80年代になると石油産業従事者の増大に伴い、農業において労働力不足が顕著になってきた。資源に乏しく食料も輸入に頼っているため、2004年物価上昇率が10%に達するなど構造的問題を抱えている。そのため国営企業の民営化及び税制改革に取り組んでいる。

二日目

今日は午前中王家の谷などルクソール西岸の観光、午後はカルナック神殿など東岸を観光する。

4 バルーンが浮かぶ朝のナイル川

朝食は中央に古代の舟がでんと置かれたレストランで、ルームナンバーを伝えるとボーイがテーブルを指定する。それからゆっくり料理を取りに行くのだが、ここにも女性の姿はない。特別な料理があるわけでもないのスクランブルエッグ、豆、ヨーグルト、ゆで卵とティーを軽くいただいた。添乗員の佐溝さんの、生野菜やカット果物は避けたほうが良いという忠告は素直に守った。

そのあと庭に出てすこし散策する、寒くはないがといった気温で安心する。広いプールがあって周りには背の高いヤシの木が立ちならび異国情緒たっぷりだ、そんなプールに一人の女性が泳いでいたのにはびっくりした。でもその女性もすぐにプールから上がって少し寒そうな様子で去って行った。そのプールの向こうにはナイル川が流れ、岸にはヨットも見える。そして対岸にはバルーンが三台禿山をバックに浮かんでいるのが見えた。

このあとホテルの正面に回ってみる、赤いブーゲンビリアがとても鮮やかに咲いていて、こちら背の高いヤシの木が目引く。さらに黄色の鮮やかな花も咲いてい

て美しい、その横に観光バスが数台止まっていた。
そこへホテルの従業員らしき男性が数人通勤してきた、半分くらいの方は地面にす
れるほど丈の長い民族衣装をまとっている。「モーニング」とか「おはよう」と声
をかけると、いかつい風貌に似合わず笑顔で挨拶がかえってきた。

5 ナイル川西岸「王家の谷」へ

8.30"ホテルをでてナイル西岸へ向かう、ルクソールの街は東岸にあり西岸へ行くの
には、街から13km離れたクソールに一つしかない橋まで行き川を渡る。ここルクソ
ールでは東岸は「生者の都」、それに対して夕陽が沈む西岸は、再生、復活を意味する
「死者の都」ネクロポリス・テーベと呼ばれ、墓所として利用されてきた。
途中はサトウキビ畑と牧草の緑の畑がひろがる景色が広がり、道路の端や川べりには
紙くずなどのゴミが散乱している。まるで片付けることはしないようだ。畑には
キャベツ、玉ねぎなども少し見られるが野菜はそんなに見られない。それにバナナ園
は多くみかん園も見られる。

ガイドの説明

- 。 エジプトに信号はないと言ってよい、カイロでさえ数箇所あるのみ
- 。 エジプト人は花や木に興味がない、でも石には興味がある
- 。 この辺りはサトウキビが主産品で、年2回収穫できる
- 。 雨が降らないので民家は日干し煉瓦で造る
- 。 エジプト人は不用品は捨てずに屋根の上に置く
- 。 トイレのチップは1ポンド(20円)、スフィクスの所だけは2ポンド

見学料金は世界標準か

45"程走ると王家の谷の入り口になる、周りは砂しかない砂漠の中に日本の早稲田
大学の調査隊が宿泊した建物が砂漠の小高い丘の上にある、でもそれ以外は何もない。
あんな所で水道はあるのかと気になった、駐車場に着くとすでに観光バスが数台止ま
っている、われわれも早速カートに乗って墓の入り口近くまで移動する。
ここは写真撮影がすべて禁止されていることと、説明用のパンフレットは何もない。
入場料は100ポンド(2,000円)、でもツタンカーメンとラムセス6世を除く三つの
墳墓しか見学できない。そのため、さらに80ポンド(1,600円)のチケットを購入し
てツタンカーメンとラムセス6世の墓を見学することになる。見学前にガイドのムス
タファーが一通り説明してくれてから最初にツタンカーメンの墓に入った。ツタンカ
ーメンは黄金のマスクがあまりにも有名だが、この王家の谷には63の墓があるもの
のほとんどが盗掘されていた。しかし、ツタンカーメンの墓だけは荒らされていなか
ったので多くの貴重な埋葬品が発掘されたという。というのも、ツタンカーメンの墓
の上にラムセス6世の墓が造られたことで、ツタンカーメンの墓は覆い隠されてしま
い盗掘を免れたという。



王家の谷入り口からの眺め(ここしか写真撮影は不可)

レリーフが鮮やかな王の墓

それが1922年11月、英国人ハワード・カーターにより発見され、奇跡的にも盗掘を免れた品々が発見されて世界中を驚かせた。中でも王の顔を覆っていた黄金のマスクはツタンカーメンの代名詞にもなった。でもこの墓は王様の墓としては規模は小さなものだという。今これを書いている他の遺跡と混同してはっきりした記憶がなく、写真もない為に小さな部屋だったということくらいしか思い出せないが、ガイドブックで確認すると...カーターが最初に発見したのは16段の石段だった。その先に前室があり、右手の玄室に1年3ヵ月後にたどり着きやっと棺の蓋をあけることができた。部屋一杯に置かれた木製金張りの厨子の中には木製の人型棺、さらに黄金の人型棺など8重の覆いがあり、最後に黄金のマスクをかぶった王のミイラが現われたという。このツタンカーメンは9歳で即位した、この時カリスマ性をもつ義父アメンヘテプ4世が亡くなり国は混乱をきたしていた。そんな中でツタンカーメンはアメン神信仰への復帰、都をメンフィスに再遷都するなど実務をこなした。が18歳のとき突然死亡、その理由は解明されていない。

でも私はツタンカーメンといえば、友からいただいたえんどう豆の「ツタンカーメン」を栽培している。曰く、ツタンカーメンの墓から発見された豆の子孫なのだが、でもそれを証明できるものはないけれど自慢の一つである.....。

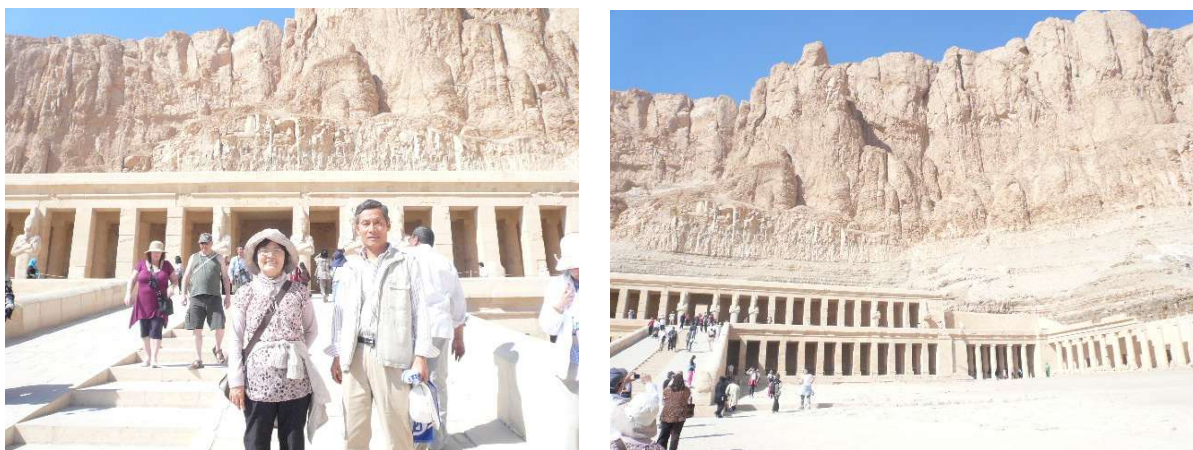
63有る墓の内ツタンカーメンがN062で、このあとN011のラムセス三世とN016のラムセス一世の墓を見学した。ラムセス三世の墓は生活用品を埋葬した小部屋がたくさんあって、それぞれ壁の象形文字のレリーフがとても美しかった。その意味ではツタンカーメンの墓はとても地味な造りといえる。さらにラムセス一世の墓は急な階段を降りていく造りで、象形文字のレリーフは少しく規模も小さかった。すばらしいレリーフは色も鮮やかに残っていて、3,000年ほども昔の作品とは思えない美しさだ。この象形文字は王様の遺体を守る呪文と考えられているようだ。11.20"王家の谷を後にしてハトシェプスト女王の葬祭殿に向かう。

6 岩肌を背にしたハトシェプスト女王葬祭殿

王家の谷から10分程でハトシェプスト女王葬祭殿に着く、ここは大自然の切り立った岩山を背にして造られている。駐車場から神殿まではトラムに乗って移動するほど建物前のテラスは広い。エジプトで初めての女王ハトシェプストがアメン神、父トトメス一世、そして自らのために造営した葬祭殿。女王の側近で建築家でもあったセムトが設計を担当、褐色の切り立った崖を背景に扇形に広がる地形を利用して造られている。巨大なテラスが三段あることが特徴で、後にコプトの教会として使用されたことから北の修道院とも呼ばれている。

たくさんの柱が並ぶ2階から3階ほどの高さまで、傾斜道が設けられているのが特長だ。ここから振り返ると建物前のテラスの広さが壮観で、観光客が豆粒のように見えるのだ。大きな柱が何本も建ち並ぶ様もすごい、どうやってこの柱を立てたのだろうか？今立てるのも大変と思われるのに、考えたら夜も寝られなくなってしまいそうだ。

12.25"見学を終わりランチタイムだが、その途中にメムノンの巨像を見学する。周りはサトウキビ畑の中に忽然と二つの巨像が現われた。アメンヘテプ三世の像で、座像の後ろには葬祭殿が控えていた。昔は王冠を載せていたため高さは22mあったが、今は2.3mの台座に15.6mの座像がのっている。その近くでは今も遺跡の発掘調査が行われていた。



ハトシェプスト女王葬祭殿

7 ランチは極めて不評

12.45"から1時間弱かけてランチタイムだ、スタレ架けが並んだようなちょっと趣のある野外レストランだ。バイキングだったがこれといった物もないので、スパゲティをたくさんとポテト、マカロニサラダとケーキを皿にとった。どうといった味でもなく食べていると、同じくスパゲティをとってきた面々が「まずい」を連発している。聞けばまだ半生状態だという、見ていてもきちんと炒めておらずいい加減だというのだ。焼肉やアイスクリームもあったが手を出すのはためらわれた、それやこれやでエジプト最初のランチは、レストランの雰囲気は良かったものの味は最悪だった。ビールは現地のステラビールをいただいたが、味はビール独特の苦味の少ないものだった。お値段は6ドル(30ポンド)と高かった。

13.50"ランチを終えてつぎはお買い物タイムで、20分ほど走って香水瓶のお店に案内されたが、とんと関心がないので売り場から離れたイスで休憩した。15.00"にここをでて午後からの見学はルクソール東岸へ向かう。

8 エジプト最大のカルナック神殿

最初はカルナック神殿を見学する。昔、王様が神であった時代、アメン神はテーベという地方都市の神だった。それが太陽神ラーと結合してアメン・ラー神となって国家最高の存在となった。その最高神の庇護に置かれた歴代の王がつぎつぎとカルナック神殿に造営したことから、カルナック神殿はエジプトで最大規模を誇る神殿となった。アメン大神殿、を中心にムート神殿、メンチュ神殿などから構成されている。

古代の神々(灼熱の太陽命の水ナイル川と荒涼たる砂漠、厳しい自然こそ神だった)

アメン	テーベの市神、ラーと合体して国家最高の地位となる	
ラー	ハヤブサの姿をした太陽神	
アヌビス	ジャッカルの頭を持つ死後の世界の神、ミイラ作りの神	
オシリス	冥界の支配者ホルス神の父、穀物の神	
メンチュ	太陽円盤を載せたハヤブサの頭をした戦いの神	
ホルス	ハヤブサの姿をした天空の神、現世の王はホルスの化身と考えられた	
トト	トキの頭をした知恵と月の神、文字の発明者	
セベク	水の神、ワニの頭が特徴	
ハピ	ナイル川の神、豊穡の象徴 etc



第一塔門



大列柱

300tもの石柱をどのように運び、且つ立てたのか!!

15.10"到着、背の高いヤシの木が立ち並ぶ大広場の向こうに、高さ43m、幅113mのエジプト最大規模の第一塔門が存在感を示している。この塔門というのは神殿の入り口にある構造物で、中央上部が凹んでいるものが多いという。この凹んだ部分はアケトと呼ばれ過去と未来、あるいはこの世とあの世の境目という。神殿の塔門は東向きに造られており、毎朝このアケトを通して太陽が昇ってくる、すなわち太陽神ラーが、夜 = 死の世界から甦ってくることを意味しているのだという。

この塔門まで導くのが左右に並ぶ山羊の頭を持つ40体のスフィンクス、その手前にはナイル川と結ばれていた運河の荷揚げ場跡も石組みが残っている。第一塔門・第二塔門をくぐるとそこは大列柱室で、その合計は134本。中央二列の12本が最も高く21m、他は15mでその差を利用して太陽の光が差し込むようになっていた。円柱の上部は12本がハスの花が開き、他はつぼんだデザインになっている。2,000年~4,000年前に造られたというが、どのようにして加工して、どのようにして垂直に狂いもなく立てることができたのか!! 不思議なことばかり。

さらに第三塔門と第五塔門にかけて2塔のオベリスクが立っている、トトメス一世が建造した高さ19.5m、重さ130tのオベリスク。そしてハトシェプスト女王が建造した高さ29.56m、重さ323tのオベリスクだ。この鉛筆のような形をした塔をどのようにして立てたか、ガイドの説明によるとオベリスクが入るような箱を造り、その中に砂を入れておく。次にその箱の上部まで続く斜面を造成し、オベリスクを引き上げて底の方から箱に入れる。そして砂を徐々に抜いていくことでオベリスクを立てたという。方法としては理解できるが、オベリスクの底部が砂をかんでしまい垂直にするためにどうするのか? 私にはそのやり方が分からない.....。



ハトシェプスト女王のオベリスク



ヒエログリフ

歴史を解明したのは「ヒエログリフ」の解読

王様の墓、神殿の建造者などが解ったのは、古代エジプトの歴史と文化を伝える象形文字ヒエログリフの解読に成功したからだ。392年にローマ教皇が異教崇拝を禁じたことで神殿への迫害と破壊が行われ、3,500年にわたるエジプト文明もとも、ヒエログリフは忘れ去られてしまった。

それから1,000年以上の時が流れヒエログリフは、それが装飾なのか文字なのか、シンボルなのか謎のままだった。しかし、1799年ナポレオン軍によるロゼッタストーン(ロゼッタで発見された3種類の文字が刻まれた石碑)の発見と、フランスの考古学者シャンポリオンの登場により数世紀に及ぶ謎が氷解し始める。彼はロゼッタストーンの3種類の文字が、同一内容を表したものと考え、プトレマイオス5世の名前を発見。1,822年にはフィラエ島のオベリスクの碑文からクレオパトラの名前を見出し、ヒエログリフの基本原則を解明したという。

9 ラムセス二世座像とルクソール神殿

次は2km程離れたルクソール神殿の見学をする、正面には威風堂々とした第一塔門とラムセス二世座像が並ぶ。そして、左の座像の横には天を指差すかのように25mのオベリスクが一本建っている。現在のビルなら6階建てにも相当する高さだ、実は右にもオベリスクはあったのだが、エジプトがフランスから時計台を贈られた際に、そのお礼として1833年フランスに贈られ今はパリのコンコルド広場に建っている。パリで見たときはフランスが戦利品として持ち帰った物かと思ったがそうではなかった。

オペト大祭の壁画が残る

ここルクソール神殿はアメン大神殿の付属神殿として建立された、アメン神殿とは2km程の参道でつながっていた。そして、年一回この参道を通してアメン神がルクソール神殿を訪れるという「オペトの大祭」のために造られたもの。帰国後にこの参道を復活させる計画が決まったというニュースがあった、ぜひ実現してほしいものだ。

塔門を入るとラムセス二世の中庭があり、次の塔門をくぐるとここも高さ19mの巨大な開花式パピルス柱が2列14本続く。この柱には神々が描かれ壁面にはヒエログリフで書かれた、ファラオの名前を強調するためにロープで作られた楕円形の枠のカルトゥーシュが描かれている。ここで見逃せないのは東西の壁に描かれたオペト祭の行列、西側の壁にはカルナック神殿を出発するアメンの聖舟の神輿が、東側の壁には神官にかつがれた神輿がカルナック神殿に戻る様子が描かれている。

続く中庭はアメンヘテプ三世の中庭で、ここにも64本の大列柱が周囲を囲むように

建っている。その次にはアレキサンダー大王の間にでる、ここはオペト祭において最も重要な聖舟の神輿を安置した場所。オペト祭はナイル川反乱期の二ヶ月目の第19日目、すなわち8月末から二週間あまり盛大に行われたという。こんなことが解き明かされたのも、ヒエログリフを解読することができたからだ。
17.30"頃だろうか神殿がライトアップされて、薄暗くなった中に浮かびあがる様はとても幻想的なものだった。



ラムセス二世座像とオベリスクのある第一塔門

すばらしい夜景を見てから17.50"見学を終り夕食に向かう。川べりのレストランに10分程で到着、メニューはムサカ料理。茄子とひき肉がトマト味で煮込んであるもので、これならおいしいかと思ったが油濃くて食べずらかった。珍しかったのはパンは三種類のタレをつけて食べるというのだが、ゴマ味と何か香辛料の物と、もう一つ種類があった。中でゴマ味はなかなかいけた。ここでもステラビールは6ドルだった。19.10"食事を終りホテルに戻り、エジプト初日の観光から解放されて20.00"過ぎには早々に寝た。